

地域との交流で、人とかがわる力を育みます ～台東区立保育園での取り組み～



三筋保育園では、「花育」の取り組みとして地域の皆さんと一緒に花を育て、園の前を花でいっぱいとしています。



玉姫保育園では、地域の一員として「桜橋花まつり」に参加し、練習しているリズムダンスを披露し、地域の活性化に協力しています。

教育委員会では、台東区幼児教育共通カリキュラム「ちいさな芽」を策定し、人として生きるための「根っこ」を育てる幼児教育を進めています。このカリキュラムの柱(分野)の1つ「人とかかわり」について、台東区立保育園の取り組みをご紹介します。

少子化、核家族化が進む中、一昔前のように子供たちが、路地で遊んで地域の人とふれあう機会が少なくなりましたが、台東区には、お祭りなどの地域の行事や世代を超えた交流が下町文化として根付いています。

台東区立保育園では、各保育園によって内容はさまざまですが、こうした地域の資源を活かして地域の行事への参加やお散歩で声を掛けてもらう地域の見守り、世代間の交流など積極的に地域との関わりを持つことを保育園活動の目標としています。

このような活動を通じて、人やものを大切にする心、人とつながる力、思いやりの心を育て、「生きる力」の基礎を培っています。

お問合せ先：児童保育課保育運営係 ☎5246-1233



谷中保育園では、地域の方から日本舞踊を教えていただき、秋の地域の行事で発表しています。



東上野保育園では、地元町会のご協力で本物の御神輿を担がせていただき、地域の伝統行事に親しんでいます。

◆ 中央図書館の催し物 ◆

「台東区博物館ことはじめ」

台東区発足70周年を記念して、台東区の博物館をとりあげます。前半は江戸時代からの博覧会や上野に開館した近代博物館誕生までの歴史をたどり、後半は台東区の一葉記念館、下町風俗資料館、朝倉彫塑館、書道博物館などを写真で紹介しします。

▶ 期 間：6月16日(金曜日)～9月20日(水曜日)

● 企画展に関連して、8月6日(日曜日)の午後4時15分からギャラリィ・トーク、9月14日(木曜日)の午後1時30分からスライド・トークを開催する予定です。



「定点写真と台東区の風景 ～名所の記憶をさぐる～」

台東区では、昭和49年からほぼ毎年、区内約60箇所の地点を撮影しています。本企画展では、定点写真として選ばれた風景を数か所とりあげ、その歴史的背景を江戸や明治時代にさかのぼって探っていきます。

▶ 期 間：9月22日(金曜日)～12月20日(水曜日)

● 企画展に関連して、10月12日(木曜日)および12月14日(木曜日)の午後1時30分からスライド・トーク、11月3日(金曜日)の午後2時からトーク・イベントを開催する予定です。

※上記の開催につきましては、広報たいとう・ホームページでもお知らせいたします。

▶ 場 所：台東区立中央図書館(台東区西浅草3-25-16) 2階 郷土・資料調査室内 ゆかりの文学コーナー

▶ 開館時間：月～土曜日 午前9時～午後8時 日曜日・祝日 午前9時～午後5時(休館日：毎月第3木曜日)

お問合せ先：中央図書館郷土担当 ☎5246-5911

連載 子供に聞かせたい、こんな話 その23

日本の植物の父

― 牧野富太郎 ―

こころざし高く

牧野富太郎は、一八六二年、土佐の国(今の高知県)に牧野家の長男として生まれました。実家は酒造りと雑貨を営む裕福な暮らしをしていました。

一〇歳のとき寺子屋で学び、その後十二歳で小学校に入学しましたが、二年で中退してしまいます。富太郎は小学校を中退した理由について、酒屋だったので学業で身を立てることは考えていなかったと、後年述べています。

小学校を中退した富太郎は、地元の学校の教師から英語を教わりながら、気ままに暮らしていました。しかし、もともと興味のある植物の採集や写生、観察に熱心でした。特に珍しいものを見つけると、ごはんを食べるのも忘れ一日中、見入っては描き写していました。

ある日、うっそうとした山奥で、それはそれでつかいキノコのキツネノヘタマを見つけたときは、大はしゃぎをして近所の人々を驚かせたそうです。

その後植物に没頭する富太郎は、研究のための書物や顕微鏡を求めようになり、ますます植物の研究に打ち込んでいくのです。もう日本だけでは飽きたらず、そのうち欧米の植物学も勉強するようになりしました。

このころから、当時の著名な学者にも知られるようになり、交流が深まってきたのです。

そして、十九歳になったとき上京します。二十二歳で東京帝国大学現在の東京大学理学部植物学教室に入ります。二十五年、二十五歳のとき「植物学雑誌」を創刊します。そして、翌年にはかねてから温めていた「日本植物志図篇」の刊行を自費で始めるのです。今でいう、植物図鑑のほりです。

それから富太郎は、東京と郷里を往復しながら研究者の地位を確立していきのですが、同時に生家も没落するのです。研究のためには、財産には目もくれなかったからとは言え、お金に不自由ななかったこれまでの生活が一変するのですから、富太郎

の苦しみは並たいていなものではなかったでしょう。

二十七歳のとき、新種のヤマトグサに名をつけた「植物学雑誌」に発表します。翌二十八歳のときに、東京の小岩でヤナギ科植物の採集中に見慣れない水草を発見します。ムジナモという植物で、これがなんと新発見だったのです。この新発見で富太郎は、世界的に名を知られるようになります。

三十一歳のとき東京大学理学部植物学教室の助手となるのですが、その時、生家は完全に没落してしまいました。富太郎が経済的に最も苦しんだのは、この頃だったようです。

六十五歳になったとき東京大学から理学博士の学位が贈られ、同じ年に新種の笹を発見します。そして、この笹に翌年亡くなる妻の名をとり「スエゴザサ」と名付けたのです。これまで着る物も買わず食べたい物もがまんし、愚痴ひとつ言わずに寄り添い研究を支えてくれた妻へのお礼でした。

七十八歳で研究の集大成「牧野日本植物図鑑」を刊行しますが、この本は改訂を重ねながら現在も販売されています。

昭和二十五年に日本学士院会員、翌二十六年八十九歳のとき、第一回、文化功労者となります。昭和三十三年一月十八日、九十四歳で亡くなります。没後、国から文化勲章を授与されたのです。

富太郎は、台東区谷中、天王寺のお墓に今も眠っています。

富太郎が一生をかけて命名した植物は、二五〇〇種以上、新発見の植物は六〇〇種余りといわれています。



田典ウエブサイト「牧野富太郎」

※出典を参考文献として文章を構成しています。小学校4～6年生用「こころざし」教育副読本に掲載

お問合せ先：教育支援館

☎5246-5921